

こども教育宝仙大学 研究室だより 第16回

「子どもの表現に気づき、子どもの世界に出会う」

子どもの日常の行為を“表現”として捉えてみると、子どもの世界はどこまでも豊かです。一見、意味がないと多くの大人が思うことに没頭する子どもの姿にも、子どもの世界はあらわれています。

一般的に“表現”というと、音楽表現、造形表現、身体表現など特定の分野に当てはめて考えてしまうかもしれません。かつては、保育・幼児教育においても、保育内容の中に「音楽リズム」「絵画製作」という領域が存在していました。ところが当時、活動中心主義や結果主義の傾向が広がったことなどから、乳幼児期の発達の特性と生活に即するため、その後保育内容の見直しが行われました。そして、現在の保育・幼児教育では、上述の領域はなくなり、「表現」という領域が保育内容の一つとして位置づけられています。この領域「表現」では、子どもが日常生活の中でさまざまに発する行為全体を“表現”として捉えていくというパースペクティブの転換が求められています。

しかし、子どもの表現に気づき、理解し、保育を展開するのは簡単なことではありません。今後ますます、子どもから生まれる自由で多彩な表現の意味と、その表現を支える保育者のかかわりや環境構成について、多角的に検討していく必要があります。表現について考えるということは、周りの世界とのかかわり合いの中で、人がより自分らしく生きようとする営みと、そのために必要な条件について探求することでもあります。すべての人がより良く生きられるためのヒントもそこで見つかるかもしれません。子どもの表現を理解することの大切さと面白さを、共に感じ考えていきましょう。

(南陽慶子 研究分野：保育学、幼児教育学)